

1/5/2

DIALOG(R) File 347:JAP10
(c) 2004 JPO & JAP10. All rts. reserv.

03565945 *#Image available*
PRODUCTION OF MATRIX FOR OPTICAL FIBER PREFORM

PUB. NO.: 03-228845 [JP 3228845 A]
PUBLISHED: October 09, 1991 (19911009)
INVENTOR(s): YOKOGAWA KIYOSHI

APPLICANT(s): SHIN ETSU CHEM CO LTD [000206] (A Japanese Company or Corporation), JP (Japan)

APPL. NO.: 02-023369 [JP 9023369]
FILED: February 01, 1990 (19900201)

INTL CLASS: [S] C03B-037/08; G02B-006/00
JAP10 CLASS: 13.3 (INORGANIC CHEMISTRY -- Ceramics Industry); 29.2
(PRECISION INSTRUMENTS -- Optical Equipment)

JAP10 KEYWORD: R012 (OPTICAL FIBERS)
JOURNAL: Section: C, Section No. 899, Vol. 16, No. 1, Pg. 95, January
07, 1992 (19920107)

ABSTRACT

PURPOSE: To uniformize the unevennesses on the surface of porous glass matrix and to obtain the matrix for a large-sized optical fiber preform with good productivity by arranging a plurality of pieces of burners in the equiintervals at the same design dimension and successively transferring and dispersing the starting position of reciprocating movement in the case of producing the matrix for the optical fiber preform by an externally fitting method.

CONSTITUTION: In a method for producing the matrix for an optical fiber preform by introducing a gaseous glass raw material 6 into an oxyhydrogen flame burner 2 and blowing glass fine particles produced by flame hydrolysis thereof on the outer circumference of a glass rod 1 for a core being rotated and relatively reciprocating and moving the burner 2 or the glass rod 1 parallel to the axial direction and thereby laminating the glass fine particles one layer by one layer on the glass rod 1 for the core to form the porous glass matrix 8 and then heating and dehydrating this matrix 8 to transparently vitrifying it, the following means is adopted. In other words, at least three pieces of burners 2... having the same dimension are arranged oppositely to the glass rod 1 for the core in the specified equiintervals in a range over the whole length thereof. The glass fine particles are deposited while successively transferring and dispersing the starting position of the reciprocating movement in at least three points.

⑩ 日本国特許庁 (JP) ⑪ 特許出願公開
⑫ 公開特許公報 (A) 平3-228845

⑬ Int. Cl.⁹
C 03 B 37/08
G 02 B 6/00

識別記号 C 8821-4G
356 A 7036-2H

⑭ 公開 平成3年(1991)10月9日

審査請求 未請求 請求項の数 5 (全9頁)

⑮ 発明の名称 光ファイバプリフォーム母材の製造方法

⑯ 特願 平2-23369
⑰ 出願 平2(1990)2月1日

⑱ 発明者 横川清 群馬県安中市疋田2丁目13番1号 信越化学工業株式会社
精密機能材料研究所内

⑲ 出願人 信越化学工業株式会社 東京都千代田区大手町2丁目6番1号
⑳ 代理人 弁理士 山本亮一 外1名

明細書

1. 発明の名称

光ファイバプリフォーム母材の製造方法

2. 特許請求の範囲

1. 気体状ガラス原料を耐火窓火炎バーナーに導入し、その火炎加水分解で生成したガラス微粒子を回転しているコア用ガラス棒の外周に吹きつけ、該バーナーまたはガラス棒を軸方向に平行に相対的に往復運動させることによって該ガラス微粒子をコア用ガラス棒上に一層ごつ積層させて多孔質ガラス母材を形成させ、ついでこれを加熱し脱水、透明ガラス化して光ファイバプリフォーム母材を製造する方法において、該コア用ガラス棒に對向してその全長にわたり少なくとも3個以上の同一寸法のバーナーを一定等間隔で配置し、その往復運動の開始位置を3点以上に順次移動分散させながらガラス微粒子を堆積させることを特徴とする光ファイバプリフォーム母材の製造方法。
2. 往復運動距離および運動開始位置の最大ずれ幅

は該バーナー間隔の1倍以上3倍以下の範囲とされる請求項1に記載した光ファイバプリフォーム母材の製造方法。

3. 往復運動の開始位置の移動が3mm以上バーナー間距離以内とされる請求項1に記載した光ファイバプリフォーム母材の製造方法。

4. 往復運動の開始位置が3mm以上バーナー間距離以内とされる請求項1に記載した光ファイバプリフォーム母材の製造方法。

5. 往復運動が逐次移動またはランダム移動で行ない、いずれの場合も実質的に堆積層の数が著しく、停止位置が等間隔である請求項1に記載した光ファイバプリフォーム母材の製造方法。

6. 往復運動がコアガラス棒で行なわれる請求項1に記載した光ファイバプリフォーム母材の製造方法。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は光ファイバプリフォーム母材の製造方法、特に光ファイバーの機能特性を低下させることなく、大型の光ファイバプリフォーム母材を高速で生産することのできる光ファイバプリフォーム母材の製造方法に関するものである。

(従来の技術)

光ファイバプリフォームの製造については開発の初期においてはコア(芯)用ガラスにガラス管を被覆するという方法(特公昭41-11071号公報参照)で行なわれていたが、近年における特長、程度の著しい向上とプリフォームサイズの大型化に伴なって気体ガラス原料を酸水素火炎バーナーに導入し、その火炎加水分解で生成したガラス微粒子を回転しているコア用ガラス棒の外周に吹きつけ、該バーナーまたはコア用ガラス棒のいずれか一方(以下説明を簡単にするためにバーナー移動で説明する)を軸方向に平行に往復運動させることによって該ガラス微粒子をコア用ガラス棒上に一層づつ堆積させて多孔質ガラス母材を形成させ、ついでこれを加熱脱水、透明ガラス化して光ファイバプリフォームとする方法(特開昭45-84155号公報参照)で実施してきている。

しかし、この種の光ファイバプリフォームの製造方法については装置方向に連続して堆積する方法(特開昭55-118838号公報参照)、多孔質ガ

ラス母材に複数本のバーナーから組成の異なるガラス形成原料を供給すると共に芯棒をバーナーに対し相対的に往復運動させ、1回の移動ごとにガラス形成原料の組成を変えることによって、半径方向に所望の屈折率分布を有するプリフォームを得るという方法も提案されている(特開昭57-183330号公報参照)、芯棒を回転させると共に長手方向に運動させ、ガラス微粒子の生成に振動運動を与える方法(特開昭58-126518号、特開昭58-8135号公報参照)、製造しようとするコア用ガラス棒の長さとほぼ等しい長さの振幅をもつ複数の酸水素火炎バーナー、または多数の酸水素火炎バーナーを横に一列に並べてバーナー列を作り、移動を行なわないガラス微粒子をコア用ガラス棒に吹きつける方法(特開昭55-70445号公報参照)、さらに光ファイバ母材ではないが複数のバーナーで供給されるガス量を調整するか、バーナーとガラス微粒子の堆積面との距離を調整し、あるいは耐熱性基材の回転数を調節してガラス微粒子の堆積密度を半径方向に沿って変化させ

て多孔質ガラス母材のひび割れを防止する方法(特開昭54-9321号公報参照)も知られている。

(発明が解決しようとする課題)

しかし、これら従来の公知の方法で光ファイバプリフォーム母材を製造しようとすると、特開昭45-84155号公報に開示されている方法ではバーナーが一本であるためにガラス微粒子の堆積速度が遅いし、長尺、太径のものを製造する場合には熱量が不足し、堆積シリカ層が紙板の強度の小さいものとなるのでひび割れが発生するという不利があり、特開昭55-120124号、特開昭57-183330号、特開昭58-8435号公報などに開示されている方法にはコア用、クラッド層が一工程で得られるという利点があるものの、コア用、クラッド層とも密度の低いものとなるので大型化するとその取扱いが困難となるし設備が大型化し、コアの屈折率分布が不明のまゝこれに薄いクラッド層が付着されるので製品が目標値と外れたものになるという欠点があり、さらに特開昭53-28444号公報に開示されている方法ではバーナーのスタートから噴出す

るガスがコア用ガラス棒の全長上で同一の条件にすることのが困難でないので、各バーナーおよびバーナー間で堆積ムラが生じ、現実的には得られるプリフォーム母材の堆積厚さの精度がわくなり、特開昭44-9321号公報に開示されている方法では堆積速度が早く、大型のものが作れるという利点はあるものの、長さ方向に一定の振幅で往復するのでこれにはバーナーの停止点と移動部が常に同一位置でくり返されるために堆積ムラが生じ、得られる堆積体は表面に凸凹をもつものとなるし、芯材としてのアルミニウムが金属不純物としてシリカ層にドープされるという欠点があるので光ファイバ母材の製造用には利用できない。

(課題を解決するための手段)

本発明はこのような不利を解決した光ファイバプリフォーム母材の製造方法に関するものであり、これは気体ガラス原料を酸水素火炎バーナーに導入し、その火炎加水分解によって生成したガラス微粒子を回転しているコア用ガラス棒の外

間に吹きつけ、該パートーまたはガラス棒を軸方向に平行に相対的に往復運動させることによって該ガラス微粒子をコア用ガラス棒上に一層づつ積層させて多孔質ガラス母材を形成させ、ついでこれを加熱し、脱水、透明ガラス化して光ファイバプリフォーム母材を製造する方法において、該コア用ガラス棒に對向してその全長にわたり少なくとも3個以上の同一寸法のパートーを一定間隔で配置し、これを1体としたパートー列としその往復運動の開始位置を3点以上順次移動分散させながらガラス微粒子を堆積させることを特徴とするものである。

すなわち、本発明者は光ファイバの機械特性を低下させることなく、大型の光ファイバプリフォーム母材を高速で生産する方法について種々検討した結果、従来公知の多孔質のパートーを使用する場合には各パートーおよびパートー間でガラス微粒子の堆積ムラが生じ、これを緩和するためにパートーを移動させると停止点と移動点でガラス微粒子の堆積ムラが生じ、得られる多孔質ガラ

ス母材は表面が凹凸をもつものになるので、本発明にしたがってここに使用する複数個のパートーを同一設計法のものに特定すると共にこのパートー間隔を等間隔とし、しかもこのパートーの往復運動の開始位置を同じ位置に止めないようにできるだけ異なる場所に分散するように順次移動させると、移動距離が特定されていることから各パートー停止位置も順次移動されると、パートー寸法、堆積条件が一定のものとされているので、各パートー間ににおけるガラス微粒子の堆積ムラが最小とされ、このパートー間隔が一定とされているのでパートー移動部の堆積ムラも少くなり、さらには往復運動の開始位置を順次移動すれば停止点が毎回異なるので停止点と移動点との間ににおける堆積ムラが平均化されるので、結果として多孔質ガラス母材を表面に凹凸のないものとすることができる、したがってこれを透明ガラス化すれば均質な光ファイバプリフォーム母材を容易に得ることができるを見出しても本発明を完成させた。

以下にこれをさらに詳述する。

7

(作用)

本発明による光ファイバプリフォーム母材の製造は気体状ガラス原料を熱水素火炎で加水分解して生成させたガラス微粒子をコア用ガラス棒上に堆積させて多孔質ガラス母材を作る際に同一設計法のパートーの複数個を等間隔で配置し、その往復運動の開始位置を順次移動分散させるというものである。

本発明における光ファイバプリフォーム母材の製造は基本的には公知の方法で行なわれる。したがって、これは多量化けい異などのような気体状ガラス原料を熱水素火炎パートーに導入し、ここででの火炎加水分解で発生したガラス微粒子をパートー列の移動または、回転しておりかつその軸方向に平行に相対的に往復運動しているコア用ガラス棒に吹きつけたこのガラス微粒子をコア用ガラス棒の上に一層づつ堆積して多孔質ガラス母材を作り、ついでこの多孔質ガラス母材を高溫に加熱して脱気、透明ガラス化するという方法で行なわれる。

8

ここに使用されるコア用ガラス棒は目的とする光ファイバプリフォーム母材のコア部となるものであることから公知のVAD法、OVD法、MCVD法などで作られたグレーデットインテックス型またはシングルモード型などのプロファイルをもち、一定のクラッド層が存在し、ガラス化後の屈折率、寸法などの構造パラメーターが測定確認されたものが望ましい。コア用ガラス棒の全長は外径変動が5%以下となるように仕上げたのを表すことを示す。

このコア用ガラス棒に対するガラス微粒子の堆積は堆積速度を高めるためには原料ガスをできるだけ多く送る必要があり、そのためにはガスの流量を高めるか、大量送付のためにパートーを大きくするか、パートーの数を多くすればよいが、一本のパートーでは限界があるので、本発明では少なくとも3本以上のパートーとする方法がとられている。これらのパートー2...は第1図に示されているようにコア用ガラス棒1に對向して並列

に並置され、これらはバーナー台3に固定されてコア用ガラス棒に平行にバーナー列またはコア用ガラス棒のどちらか一方を往復運動するようになっている。このバーナー2...には基本ガスとしては水素ガス送入パイプ4、酸素ガス送入パイプ5、キャリアーガス（例えば純素ガス）に両側された四極化けい素送入パイプ6からのガスが送入され、これが火炎7を形成し、この火炎加水分解で発生したガラス微粒子がコア用ガラス棒1の上に堆積して多孔質ガラス母材8が形成されるのであるが、多孔質ガラス母材8の表面を凹凸の少ないものとするということから、ここに使用されるバーナー2...はすべて同一のダイメンションで設計された例えば石英製の同心円状多孔質バーナーとし、各バーナーによる堆積条件を同一のものとすることから、これらのバーナーはそれぞれ独立にガス条件がコントロールできる制御機構9を備えたものが望ましい。これらのバーナー2...はそのバーナー出口とガラス微粒子堆積面との距離がいずれのバーナーも同一となるように

設置することが好ましいが、この各バーナー間の距離は接する火炎同志の干涉効果を低減させるということから火炎7の離れた位置での炎の伸び率の1.8倍～2.5倍の範囲で等間隔となるようすればよい。炎の伸び率は直角方向の往、ガスの速度、距離に依存し、堆積の進行に伴なって拡大していくが、堆積効率は太い径のほうがよいので、バーナー間隔は太い堆積径を基準として決めるのがよい。また、図には多孔質ガラス母材8の両側端部が加熱バーナー9の火炎10で加熱されていることが示されているが、これは終端部ではガラス微粒子が密度の小さいものとなるし、この部位には応力集中が起り易く、したがってこの部分でび割れなどが発生し易いことからこの部分を常時加熱して密度を高くしておけばよい。

このような装置でコア用ガラス棒を回転させ、全バーナーに着火し、バーナー列とガラス棒を相対的に往復運動させて、気体状ガラス原料の火炎加水分解で発生したガラス微粒子をコア用ガラス棒に堆積させて多孔質ガラス母材を作ると、各バ

1.1

ーナーが同一寸法のものとされ、かつ堆積条件を合せているのでコア用ガラス棒に堆積されるガラス微粒子の量は各部位において略々同量となるが、往復運動時には当然一時停止して逆方向に運動が開始されるので停止位置においては移動部にくらべてどうしても堆積量が異り、これは長時間同じ位置で繰り返されると可成り大きな差となってきて結果において目的とする多孔質ガラス母材が第2図(a)のような凹凸をもつものになる。

本発明はこのような不利を解決するためにこの往復運動の開始位置を3点以上に順次移動させるものであり、これによれば例えば第2図(b)に示したようにバーナー群の往復運動の開始位置がすると、第2図(a)で示した形状が発揮される。停止点のずれをさらに多くすると第1図のようになり、バーナーの停止による堆積部の変動部分が順次ずれ込み、これをくり返していればこの堆積量の変化が全体的に分散平均化されて目的とする多孔質ガラス母材は表面に凹凸のないものになるという有利性が与えられる。

1.2

この発明では移動開始点を全体に分散させることが目的とされるので、2点のバーナー間距離内では開始点の多いほうが好ましい。本発明の移動開始点は第1図のように一方の場合が基準とされるが、第2図(b)、(c)に示したように往復、ジグザグ移動、またはランダム移動が可能である。また1回目ではなく、数回の単位に開始点を移動したり、往の増大につれて変えるなど、目的、条件によってこれらを組合せてもよいが、いずれの場合も充電部の層の数が実質的に常に一定となるよう、移動スケジュールを定めることが重要である(第2図、b、c図)。移動開始点は順次ずれるが、隣接バーナー位置までずれた点を1ユニットとし、少なくとも1～3ユニット間でくり返すことが望ましい。ユニットが大きくなると、表面の平滑性は良好となるが、全长の両端部がユニット数に比例して長くなり、無駄となる(第3図)。付着量は重量換出装置などで連続的に計測し、目標重量近くでは停止線の位置を幅広くとり、層の数に過不足がなく、かつ目標量が

得られるようなスケジュールで進めることがよい。

このようにバーナーの往復移動距離が大きいと両端のテーパー部が増加し、定常部は減少するので、これは請接バーナー間隔の3倍を超えない範囲とすることがよく、さらにこのバーナーの往復運動の開始位置の間隔はバーナー間隔、コア用ガラス棒の径、堆積体の径、バーナーの口径、炎の大きさなどにより異なるが、これが大きいと効果が少なく、小さいと時間的に序を方向での堆積量、密度などが異なり、変形を促進するので、バーナー間隔の1/3~3倍の範囲とすることがよい。

なお、このようにして得られた多孔質ガラス母材におけるガラス微粒子は密度が低くするとガラス母材にひび割れが発生して取り扱い難いものとなるので堆積後が大きいものは平均堆積密度も大きく設定し、少なくとも $0.3 \sim 1.5 \text{ g/cm}^3$ のものとすることが好ましいが、この多孔質ガラス母材におけるガラス微粒子の堆積量および密度を算出するためには水素量、酸素量、気体状ガラス原助するためには水素量、酸素量、気体状ガラス原

料の量比などのガス条件、バーナー出口の経路、バーナー出口と堆積面の距離、コア用ガラス棒の回転数、バーナー火炎の移動速度などの1つまたは2つ以上をコントロールすればよい。

バーナー移動を行なうとバーナーやバーナー台、配管などが移動の振動を受け、異物を発生し、堆積体表面に付着し、気泡発生の原因となるので、移動はガラス棒で行なうことが好ましい。また、これは横型だけでなく、タテ型で行なうことも可能であり、移動で行なうと開口部が少なく、外都からの異物を遮断できる。

この反応装置は排気口、給気口、バーナー差し込み口および主回転伝達部の一組を除いて密閉しておくことがよく、これによれば(3)の付着、バーナー炎のゆれが防止され、排ガスの管理ができるので、気泡のない多孔質ガラス母材を容易に得ることがができるという有利性が考えられる。

なお、このようにして得られた多孔質ガラス母材はついで公知の方法で透明ガラス化して光ファイバプリフォーム母材とされるのであるが、この

15

透明ガラス化は電気炉中において必要に応じて得られる塩素ガス、 SO_2Cl_2 、 SiCl_4 、フッ素ガスなどを含むシリウム、アルゴン、窒素ガスなどの不活性ガス雰囲気中で1,000℃以上に加熱して脱水、透明ガラス化すればよく、このようにして得られた光ファイバプリフォーム母材はガラス脱脂または電気炉で延伸加工し、プリフィームアナライザによってプロファイル検定およびデザインジョンを確認し最終製品とされる。

(実施例)

つぎに本発明の実施例をあげる。

実施例1

模型外付装置に直径10mm×長さ800mmの石英ガラス棒を取りつけた。この石英棒の側面に対向して同一寸法で設計された四重管同心円バーナーを中心間距離100mm×6本を等間隔に並べ、その両端に加熱バーナーを取りつけた。各バーナーの中軸は石英ガラス棒の軸心と合致るようにし、その距離を同一にしてバーナー台に固定した。各バーナーの炎はあらかじめ調べ、炎の形、温度が同

一になるよう、バーナーの向き、ガス条件を合わせた。

外付装置の回転数を30rpmで回転させ、バーナー列にガスを流して点火バーナー列を10mm/minで往復運動させた。バーナーは10mm移動したら逆方向にもどることを確認し、左端で止った時点からキャリヤーガスに同伴させた四塩化珪素を流した。原料は炎の中で火炎加水分解してシリカ微粒子を生成し、ガラス棒の表面に堆積した。バーナー列は100mmを移動した時点で5秒間停止し、次いで左側に60mm/minの速度で10mm移動させた。左側へ移動してきたバーナー列は最初のスタート位置の10mm手前で止めるが、この時点で各バーナーは各々10mm手前で止まるので、堆積層は左側移動時には100mmおきに10mmずつ層が疊切れた。次に5秒間停止後2回目のスタートを行い100mm右に移動し、1回目より10mm右でバーナー列を止め、そして左へ10mm移動した。この停止点は1回目のスタート開始点から10mm右にずれた点で、層は各々10mmづつ途切れた。これを10

回数を数すと、スタートから100m石にされた点が移動開始点のスタート点となり、これは第2バーナーの1回目の移動開始点にあたり、これが1ユニットである。1往復につき100mずつ不足の差を生じたが10回の繰り返して1周分(1000m)欠け15周程度した事となるが、1ユニット、100m間にバーナーの停止点は11ヶ所、堆積場の途切れに停止点は10ヶ所に相当するに分散された。

次に移動の開始点を順次左へずらせるが、スタートは100m 左へ行った時点からじりじり、また100m 左へさらに移動させる。次に左へ移動するとともに100m 移動する。すると各爆破群の左側で10mだけ重ねて堆積される。左端で5回停止せず右へ100m 移動させ、停止後再び左へ100m 移動する。この動作を10回繰り返すと左端のスタート点にもなる。左へもどる時は、1往復につき10mずつ重ねて堆積されるので1ユニットが終ると堆積層が1層と1層少くなり、右へ移動時の15層と合わせて40層となる。

本実施例ではこのモニタ開き4往復、移動増

積層が100 層で終了した。

ガス条件は堆積の途中で増加させ、特にエニグマの切りかえ時に大きく変えて、最終的には 8.18 g/min , $D_s = 38 \text{ }\mu\text{m}$, $SIC = 2.4 \text{ g/min}$ 後じた。また、これらの位置移動、ガスの切りかえは全てコンピュータにより行った。

作成した堆積体は、両端に約 120mm のコーン部を持った均一な白色ストートで、直面部長さが約 410mm、直径 145mm の堆積物の重量は 4.95kg で凸凹のない非常に平滑なストートが得られた。

このスタートは 1,520 °C の電気炉で 5 % の塩素ガスを含む HCl ガスを流しながら培養したが、直

即400ms間には異常な心電図は無かった。

比較例 1

実施例1で用いた装置で、次の3種類の実験を行った。(A)は1本バーナーで800mmの全長を往復移動させた。(B)は2本バーナーで800mmの範囲を往復移動(定常部は400mm)した。但し、これは定常部は1回の移動で2本バーナー堆積により3層となる。(C)は実施例と同じ6本バーナーで800mmの全長を往復移動させた。

3 9

19

ナードで100mm間を定点移動させた。履の数はいずれも180履とし各方法とも合せた。バーナー散が少ないと堆積している時間より冷却されている時間が長くなり、熱量が不足するので融水蒸量を多くした。これ等の比較例を実験例1とともに第1回に示す。

バーナー	燃焼時間 (分)	露点温度 度	燃焼度		燃焼度 度	燃焼度 度
			火炎長さ mm	火炎速度 mm/min		
A	6	2.0	4.6	5.1	4.35	1.01
B	1	4.2	11.7	4.31	0.11	ナシ
B'	2	3.6	6.8	1.31	0.11	ナシ
C	6	2.6	4.7	4.37	0.11	ナシ

2

比較例の場合は3時間と過ぎると変形部分が強度され出し、次第に径が凹凸となるのでこれ以上堆積する事は困難であり、堆積効率が著しく低下してきた。

実験例 2

直徑14.0mm、長さ120mmのシングルモード用コア石英ガラス棒を準備しその両端にダイヤー用石英棒を接続した。この条件で全体の芯を合せ、コア用石英ガラス棒の外径変動が±100 μ (±0.03%)以下となるようガラス設置で修正した。コア部は英國ヨーク社製ブリフォームアナライザーポートにより構造パラメータを測定し、実施したブリフォームに必要なクラッドの厚さを計算求めた。

コア用石英ガラス棒はセメントで表面の汚れを掃きとり、タテ型の密閉式外付装置の回転部に垂直に装着した。回転駆動部はコアガラス棒を装着したまま秤量台上に載せられ、更にこの秤量台は上下に移動可能な大型引上機の可動台上に固定した。垂直に設置されたコア用ガラス棒は回転させて熱

石を合せた後30rpmで回転させた。

バーナーは実験例1に用いた同心円状回路管バーナーを6倍、100mm等間隔でタテに配置に並べ固定した。排気はバーナーの対面側にとりつけ、チャンバーの上下から横様な空気を送入した。ガス条件は実験例1に準じた。ガスを点火し、引上機を昇降させ移動速度を10mm/minに設定した。ガラス棒上に真物、欠陥が無いことを確認し、コア用石英ガラス棒の底下降部より 316A。ガスを流し、100mm 間を1エニットとし位置の移動を10mmづつらせ、10往復、40周で元のスタート位置にもどった。これを4回繰り返した後、重量調節のため停止点の間隔を変えた。第1回目の調整はすれ間隔を15mmとし、5点間移動を行い10周で止めた(第2回C)。第2調整は3点間移動(第2回b)を1回6周、最終的に3点間移動(第2回a)を4回行い目標重量を達成した。でき上ったストークは表面が一様で凹凸は全く無いものであり周の数は190 周、ストークの重量1.04kg、時間は5.45時間であった。これを1,510 チ、ヘリウム、

2 3

専業ガス中で脱水、冷却したところ、78.9mmの透明なインゴットが得られた。

2 4

第 2 表

堆積時間 (時間)	0	1	2	3	4	5	5.45
堆積量 (g)	0	164	517	107	1,011	5,144	8,848

本インゴットは電気炉を用い外径47mmに延伸し定期を吸引した。本ファイバの特性値は第3表に示すとおり安定し、クラッド層の駆動は全く見られなかった。

(発明の効果)

本発明による光ファイバプリフィーム母材の製法は前記したように液体状ガラス原料の火炎加水分解で発生したガラス微粒子をガラス棒に堆積して多孔質ガラス母材を製造するときに、ガラス棒に対向してその全長にわたり複数個の同一寸法のバーナーを一定間隔で配置し、その往復運動の開始位置を順次移動分數させるというものであり、これによれば往復運動における停止点がずれるので長時間の運転後には得られる多孔質ガラス母材の表面における凹凸が平均的に均一化され、構造特性を低下させることなく、また軸移動を行わない、反応チャンバーを密閉することで気泡の低減も可能となり、大型の光ファイバプリフィーム母材を生産性よく容易に得得することができるという有利性が与えられる。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明の方法に使用される多孔質ガラス母材製造装置の断面図を示したものであり、第2図は本発明の方法におけるバーナー群の往復

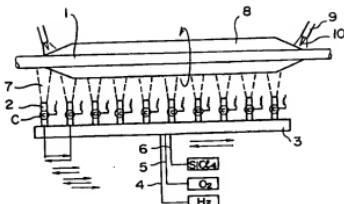
第 3 図		ファイバーホルダ	
直径 (mm)	屈折率 (n)	λ (550~570 基長 nm)	在透光率 (1.10 μA·40W/m)
φ1.35	1.515	1.187	0.35
φ1.55	1.515	1.184	0.34
φ1.75	1.515	1.171	0.33
φ1.95	1.515	1.160	0.34
平均値	1.514	1.176	0.34

2.7

運動の開始位置を順次移動させることを示す模式図を、また第3図は1ユニットをバーナー距離の2倍、3倍に拡大したときの末端部の形状を示したものである。

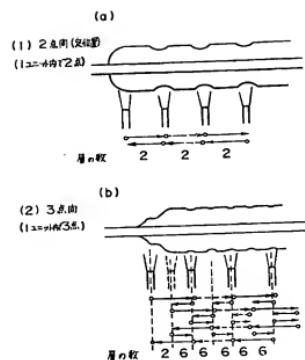
2.8

図 1

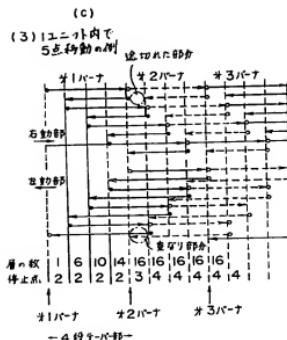


特許出願人 信越化学工業株式会社
弁理士・代理人 山本亮
日 本 著 作 証

第 2 図



第 2 図



第 3 図

